梅光学院大学博物館現蔵・中野家旧蔵『明治俳諧百雅集』所載俳人紹介

田口　寛

梅光学院大学博物館蔵中野家旧蔵書群について

梅光学院大学博物館（以下、梅大博物館）には、中野家旧蔵の、未整理の蔵書群一六〇点（冊）前後が存在する（以下、中野家旧蔵書群）。中野家と梅大博物館とを結んだのは、梅光学院大学名誉教授（現）の宮田尚氏である。中野家の分家筋にある中野猛氏が、宮田氏と説話文学研究を通じて長らく交流があったことなどから、中野猛氏自身は大分県日田市出身であるが、もともと下関にあった中野家の（一部）蔵書群を下関にある梅光学院大学に平成一一（一九九九）年一月二一日、寄贈なさった由である（当時は梅光女学院大学。宮田氏記「中野猛家俳文書受領の経緯」等に拠る）。

平成二四（二〇一二）年七月、中野猛氏が宮田氏に宛てられた書簡（梅大博物館現蔵）によれば、かつて下関の田中町に中野屋と号する商家があり（中野猛氏には本家筋）、そこに俳諧を趣味とする水月（以下、水月翁）が当主として居た。水月翁は梅守庵を号し、本名を中野兼三といったらしい（後文参照）。水月翁の句碑が下関の亀山八幡宮境内に現在も残っている。水月翁の弟に同じく俳諧を趣味として日田に移り住んだ中野勘兵衛がおり、その孫が中野猛氏という。

水月翁等の協力を得て下関の赤英社催主暁庵（飛鶴仙一潮）入江卯兵衛（中之町）が生み出した句集版本が、本稿の取り上げる資料である。その概要、紹介は次節に譲るが、中野家旧蔵書群には他にも、水月翁や中野氏の記名のある版本・写本が数多く確認できる。それらは水月翁の俳諧の趣味にも活かされたと思われ（そもそも俳諧のための収書もあろう）、寄贈時以来、俳書として一括して扱われているが、厳密に一々を見ていくと、全てがそのまま俳書といえるとも限らず、本稿においてはひとまず蔵書群という呼称に止めておく。中野家旧蔵書群の詳細全容については、また機会を改めて調査整理の結果を報告したい。

なお、稿者は特に日本中世文学・軍記を研究対象としているが、中野家旧蔵書群と稿者との出会いは、稿者が梅光学院大学における教員主催の研究会として、「博物館所蔵資料を解読する会（仮）」を平成二四年度後期より開始したことによる。中野家旧蔵書群の全容把握については、当会の活動によるところが大きい（会においては中野家旧蔵書群を「中野氏寄贈資料」等とも称す）。現在（平成二六＝二〇一四年度後期）までの間、次の学生が数回乃至長期の参

加経験を有している（五〇音順、学年不問、在学生・卒業生混在）。

坂本愛実・清水美里・西本有希・平原レイナ・村岡千咲・村上和世・村田恵理・矢都村典子

その活動の中において、「明治俳諧」については門外漢ながら、明治時代の下関における文化状況の一端を窺う上で標題の資料には関心を惹かれたので、この機に紹介に及んだ次第である。

この紹介に際し、前述の中野猛氏・宮田尚氏、梅大博物館長（大学教員）渡辺一雄氏、そして同館学芸員（大学職員）佐藤睦子氏に御礼申し上げたい。

『明治俳諧百雅集』概要

『明治俳諧百雅集』（以下、単に『百雅集』）は、先述のとおり水月翁等の協力を得て暁庵が撰集・刊行した句集の版本で、版種は整版と見られる。相応の数が刷られたことが想像されるが、『補訂版　国書総目録』（岩波書店）・『古典籍総合目録』（国文学研究資料館）等には他の伝存を確認できず、国文学研究資料館ホームページ（http://www.nijl.ac.jp/）電子資料館「日本古典資料調査データベース」によって日田市立淡窓図書館にのみ、一点所蔵されることが確認できる（未見）。ただ、梅大博物館蔵本は撰者に次ぐ筆頭者・序文執筆者、水月翁の旧蔵と目され、水月翁（梅守庵）の本名が墨で訂正してある点（次節参照。水月翁にとっては痛恨の誤刻であったろう）、重視される。

書誌は以下のとおり。

請求記号：（未定、仮整理番号8）　巻冊：一冊　外題：「明治俳諧百雅集」（表紙中央に刷題簽、匡郭なし）　内題：「長門國下關市／赤英社　暁庵撰／明治俳諧百雅集　品賓弗」（見返し。正確には題の右行に「長門國…」、左行に「赤英社…」）　装訂：袋綴（結び綴）

寸法：縦二一・八糎×横約一五・八糎　表紙：緑青色無地（見返し側には反故紙の利用あり）　見返し：本文共紙　料紙：楮紙　紙数：全五八丁（前後遊紙なし、後見返しが表紙から剥がれ、遊紙化）　一面行数：不定　用字：漢字平仮名交じり　匡郭：四周単辺、縦（内側）約一八・四糎　書入：（別文参照）

蔵書印：（なし）　刊記：（内題参照）

また、一冊の構成は以下のとおりである。

第一丁オモテ：末尾に「梅守庵主人水月」とある序文（撰集刊行経緯）。

第一丁ウラ　：右下に「半僊謹寫仙半」とある「はせを」（松尾芭蕉）肖像、肖像上方に「順座／不同／描画／年齢／不定」とあり。

第二丁オモテ：末尾に「丙午春日　永春庵あるししるす桃其」（丙午は明治三九＝一九〇六年か）とある文章。

第二丁ウラ～五二丁オモテ

：百雅集の本篇（一面ごとに一人の一句・〈注記・〉俳号・肖像・住所・本名）。

第五二丁ウラ：丸囲いに「餘興／赤英社／十哲」とある題名。

第五三丁オモテ～五七丁ウラ：「十哲」の各句。

第五八丁オモテ：末尾に「于時明治三十九年春　飛鶴仙一潮
　　暁庵」とある跋文。
第五八丁ウラ　：暁庵の一句。

なお、後見返し右に「明治卅九年四月廿七日」と墨による書入がある。刊行時期は、明治三九年春、四月二七日以前と見て誤りあるまい。

次節によっても判るように、百雅集本篇は一〇〇人の句、すなわち文字どおり一〇〇句から成るが、それに「余興」の一〇句と暁庵の一句が付載されるため、『百雅集』一冊は、全部で一一一の句が掲載されている。一〇〇人の詠み手は、下関稲荷町の対帆楼にいた遊女や、台湾の台南市に駐在したらしい者など、様々である。地理的にも、西は如上の台南から東は常陸国（茨城県）まで広範であるが、下関近隣が最も多く、住所表記も下関に近づくほど簡略になる傾向があるので、基本的に当該句集は下関で作成され、下関で鑑賞されるべきものであったと見なされる。

排列の意図については未詳で、第一丁ウラに「順座不同、描画・年齢不定」とあるのをそのまま受け止めて良いようにも思われるが、特に同じ丁のオモテとウラで、住所等に近い関係を見出せる場合がある（例えば第一三丁オモテ・ウラは夫婦と思しい。次節参照）。

『百雅集』所載俳人簿――俳号・住所・本名等――

本節においては、『百雅集』の中から、句と肖像以外の情報について、翻刻し列記、一覧化する。翻刻は努めて精確を期し、旧字・異体字も特に人名はそのままとしたが、印刷の不鮮明な部分もあり、なお誤読のある場合には、ご容赦いただきたい。また本来であれば、各句の内容や序文等を含む全文を翻刻掲載したり、明治三〇～四〇年代の下関市街地図等を準備し点を落とすなどして俳人たちの実在や分布傾向を詳しく確認、あるいは彼らの経歴等を精査したりもすべきところではあるが、まずは紹介に止め、上記作業は別の機会に譲りたい。

（凡例）
丁数オモテ・ウラ　〈注記〉俳号　住所　本名　通番　※適宜、丸括弧にて私注を施した。

（本篇）
2ウ　〈六十翁〉梅守庵　田中町　中野兼三（吉と刷られているのを三と墨で重書）　1
3オ　〈八十二翁〉鷺友　王司町　松野萬吉　2
3ウ　〈六十二翁／医〉紫溟　西細江町　三原恭吉　3
4オ　三巴　東京芝区三田屈新（新堀カ）町　桒田亀太郎　4
4ウ　氣水　熊本　三浦愛五郎　5
5オ　〈七十翁〉漁陽　阿弥陀寺町　相山秀四郎　6
5ウ　二水　西南部町　二川愛之助　7
6オ　垂洲　台南市街下横町　帯刀勝太郎　8
6ウ　香保　台南支庁宿舎　濱地久吉　9
7オ　角士　台南市打石街　田尻甚太郎　10
7ウ　露外　讃岐国仲多戸郡榎井村　高尾庄次郎　11
8オ　七谷　豊前田町　中野卯八　12

8ウ　〈六十歳〉かつ子　西細江町　三原かつ子　13
9オ　〈六十七翁〉三我　台南開仙宮街　藤谷知光　14
9ウ　誠宇　東京牛（牛込カ）区天神町在台南　山田守弘　15
10オ　風和　静岡県駿東郡清水村　鳥居國太郎　16
10ウ　如岡　信濃国上伊那郡伊那町　東條丈四郎　17
11オ　吸江　永福寺寓　守田高隠　18
11ウ　菊文　対馬在釜山　神嵜徳郎治　19
12オ　〈医〉茗居　豊浦郡豊東村　雑賀魯逸　20
12ウ　貞衛　田中新町　熊野兵輔　21
13オ　〈六十七翁〉素洲　上野国新田郡尾島町　岡田三郎　22
13ウ　〈六十一老女〉郁年　々国々町（上野国尾島町）岡田いく　23
14オ　南山　東京々橋区築地　岩田孫一　24
14ウ　一狂　広島呉市三番町　満木平之助　25
15オ　蘭亭　長門国厚狭郡舟木町　今橋綱之助　26
15ウ　智昇　門司市新町　和田虎吉　27
16オ　蛙窓　引島福浦　柳敏雄　28
16ウ　閑雨　山口県玖珂郡余田村　平井完　29
17オ　社楽　伊勢国多気郡御絲村藤原　中井恒太郎　30
17ウ　孤萍　引島福浦　升田貞吉　31
18オ　紫山　豊浦郡蒲野村　横山彊三郎　32
18ウ　玉蕾　観音崎町　菅沼友吉　33
19オ　不昧　豊前田町東光寺十三世　補陀宏天　34
19ウ　松年　香川県仲多戸郡琴平町　山神雅一　35
20オ　花月　周防熊毛郡塩田村　小山嘉作　36
20ウ　竹斬　播磨国宍粟（粟カ）郡山崎町　安井寅一　37
21オ　月湖　観音崎町　原田竹次郎　38
21ウ　〈僧〉江月　豊後日田　栗崎甚吾　39
22オ　霞江　今浦町　茂原勘之助　40
22ウ　東烏　阿弥陀寺町　藤井源次郎　41
23オ　子耕　今浦町　田上友太郎　42
23ウ　茶遊　壱岐国　篠原藤五郎　43
24オ　一勢　王司町　戸石虎次郎　44　＊戸字存疑
24ウ　可水　対馬国　三山元治　45
25オ　蝸宿　豊前企救郡松枝村畑　奥俊吾　46
25ウ　草居　阿弥陀寺町　鶴岡喜太郎　47
26オ　松月庵　入江町　關谷耕雲　48
26ウ　一覺　田中町　網藤太吉　49
27オ　亀友　豊後日田　中野勘兵衛　50
27ウ　竹塢　豊前小倉　荒井泰平　51
28オ　芦月　台南市三四街　福久金蔵　52
28ウ　暁馬　台南市打石街　橋本勤五郎　53
29オ　蘭秀　西端町　伊藤保太郎　54
29ウ　五洲　王司町　土岐多蔵　55
30オ　月窓　引島福浦　秦正一　56
30ウ　秀月　門司市西本町　平戸豊太郎　57
31オ　遊山　在筑前直方町　升田悟一　58
31ウ　凉月　岬之町　浅国治郎右ヱ門　59
32オ　鬼豊　豊浦郡厚母郷　来見田文治　60
32ウ　貫之　駿河国駿東郡富岡村　湯山一　61
33オ　〈僧〉中洲　豊後国日田　福原圓　62
33ウ　月友　長門国萩橋本町　鶴屋新五郎　63
34オ　秋眺　阿弥陀寺町　三浦虎蔵　64

34ウ 茂人 入江町 斎藤誠三郎 65
35オ 雲遊 豊浦郡安岡 波多道隆 66
35ウ 〈六十七翁〉霞桜 豊浦安岡 吉川市次郎 67
36オ 常月 奥小路町 川谷常三郎 68
36ウ 一志 田中新町 福島得蔵 69
37オ 嶋堂 門司市羽衣町 松島屋衛之助 70
37ウ たつ子 長門町 井藤たつ子 71
38オ 濱の家 在下關 安斎源一郎 72
38ウ 金鱗 入江町 關谷福太郎 73
39オ 夢蝶 門司市内本町 八尋丈太郎 74
39ウ 松巨 周防玖珂郡高盛 宮原武一 75
40オ 一徹 下關市 新田周寛 76
40ウ 茂樹 豊浦郡大坪 田中熊太郎 77
41オ 古琴 田中新町 松本藤助 78
41ウ よね子 長門都濃郡須々万村 末廣よね子 79
42オ 千帆 神宮司町 岡田友吉 80
42ウ 芳藤 阿弥陀寺町 勝原儀助 81
43オ 〈六十五翁〉集馬 神宮司町 山縣勝太郎 82
43ウ 〈画工〉五黄 筑前博多大浜町 西半仙 83
44オ 里孫 門司市新町 野村喜三郎 84
44ウ 〈医〉子龍 長門深川村 鈴木彦太郎 85
45オ 星橋 門司市新町 池山文吉 86
45ウ 為静 豊前田町 山縣久三郎 87
46オ 抱月 播磨国宍西（粟カ）郡安志村 中村秋治 88
46ウ 蘭士 香川県綾哥郡岡田村 矢野利吉 89
47オ 〈遊女〉紅葉 稲荷町対帆楼内 （なし） 90
47ウ 〈遊女〉玉紫 稲荷町対帆楼内 （なし） 91
48オ 銀甫 常陸国那珂郡中野村 安源蔵 92
48ウ 〈青鳩庵〉寥馬 下総国東葛飾郡流山町 岩田僖助 93
49オ 暁子 京都横王子（大路カ）村 吉田昌一郎 94
49ウ 〈六十一女〉如竹 中之町 入江のぶ子 95
50オ 紛月 大坂西区江戸堀 荒谷毎松 96
50ウ 河村 田中海門 河村峯吉 97
51オ 知誠 長崎町 長岡音五郎 98
51ウ 〈八十一才〉とミ子 王司町 大沢とみ子 99
52オ 〈医〉永春庵 長門大津郡蔵小田村 西尾弥三郎 100
（赤英社十哲）
53オ 指挑（桃カ）田中町 能見職之助 101
53ウ 黙道 王司町 國分寺住 102
54オ 羅月 三百目町 村上嘉兵衛 103
54ウ 素人 三百目町 武谷太郎 104
55オ 古朗 西細江町 三原賚太郎 105
55ウ 晴湖 關后地村 綿貫源之助 106
56オ 圓世 入江町 關谷禎造 107
56ウ 古海 西南部町 岡野唐吉 108
57オ 一山 三百目町 三谷五郎兵衛 109
57ウ 錦石 田中新町 三浦若松 110
58ウ 〈七十叟／催主〉暁庵 中之町 入江卯兵衛 111

（了）

（たぐち ひろし）